

羽源記

卷

四三

K 2074
Si
2





羽源記

卷

四三

K. 209.4
61
2

限感
三

羽澤記 卷之第之

蝶 赤白岩軍 夜討之事

岩根澤 要言 羽澤と固めたる 赤海林と七郎武政
とて 赤白岩軍の 赤白岩軍の 赤白岩軍の 赤白岩軍の
山川 西軍と 赤白岩軍の 赤白岩軍の 赤白岩軍の
山形より 赤白岩軍の 赤白岩軍の 赤白岩軍の
赤白岩軍の 赤白岩軍の 赤白岩軍の 赤白岩軍の
赤白岩軍の 赤白岩軍の 赤白岩軍の 赤白岩軍の
赤白岩軍の 赤白岩軍の 赤白岩軍の 赤白岩軍の

あつたはつたにたつたのちきまきくしと名と惜し兵にせし
戦陣のちきまきくしは教陣のし物見らう流地し目と驚
し一にたつたはつたのちきまきくしはつたのちきまきくしはつたの
教陣のちきまきくしはつたのちきまきくしはつたのちきまきくし
し教陣のちきまきくしはつたのちきまきくしはつたのちきまきくし
宵の向し陣をとめてつたを教陣のちきまきくしはつたのちきまきくし
子の初めしつたを付しつた城にちきまきくしと掛け焼くつたを
教陣のちきまきくしはつたのちきまきくしはつたのちきまきくし
あつたはつたにたつたのちきまきくしはつたのちきまきくしはつたの

敵大勢めつたのちきまきくしはつたのちきまきくしはつたのちきまきくし
しつたのちきまきくしはつたのちきまきくしはつたのちきまきくしはつたの
作むしつたのちきまきくしはつたのちきまきくしはつたのちきまきくしはつたの
しつたのちきまきくしはつたのちきまきくしはつたのちきまきくしはつたの
けしつたのちきまきくしはつたのちきまきくしはつたのちきまきくしはつたの
敵の城にちきまきくしはつたのちきまきくしはつたのちきまきくしはつたの
後つたのちきまきくしはつたのちきまきくしはつたのちきまきくしはつたの
しつたのちきまきくしはつたのちきまきくしはつたのちきまきくしはつたの
よかつたのちきまきくしはつたのちきまきくしはつたのちきまきくしはつたの

押包くぞを攻めしつゝ岩縁百歩程毎つゝえ森討
死し思定らる其上名を得しきつゝおれが少くも屈
せむと憂面し一十文まよおまやう憂ははと憂面しつゝ
敵の屯に地入り堀柵を切破り陣屋に火をとも登
ちつゝ折る節西風流くして煙かたよ充滿りてさ
しと大勢しつゝも人しつゝの足とさつゝと群
々立て抱くしつゝ生後登橋ありて返り大勢切て
入つて進きて攻めしつゝは卒前筑前守も獲てきて
無言甲斐者なり敵の僅の山路を引細んで討

可きや兵士と自ら大長刀と振廻りつゝと進
みしつゝけさの東海村新築意とつゝ法師武者
獲りて地をたて撞倒しつゝ馬つゝつゝあを東
山村が下人馳来りて首取りつゝ權田主水進水
甚多らと少くも主のきつゝと目の前を討つて
安しつゝおまやうこれと新築意のたちつゝ馳来り
押入してあつゝつゝと新築意の事とせむ
ちよ樹の権田と澄の上帯一掃掴んで曳と言
つて投捨て遺水と捕つゝつゝし御もむとごう

乗る馬の鞍のさし鞆を揮つた首捲切て捨て
まけり山形皆付備へ肝と流し大將を討たれた
り安らは織よりくまれば叶りて舟通ひて人
寒河江の大路より引返く御膳の兵を千騎
三段に群して池の邊に舟入り海を渡りて
錦さやむらひの流石ち勢なきは其は後入
川に細川の要塞を搦籠りてり若狭より
白岩のさき村九郎を討て始り弟従の侍を將
溝合のさき細衣十を討て人取りの籠りては
まは抄何りり毛薙波旬の妻を討てり是
りてのさきより所より夜まけて後の海山より
鳥鳴の聲のよしの嘶ぬるまじむら村九郎を討
たてり舟を甲したるはぬる標を後なる為祚願を
あし難くおのむらひの流石を討てり御膳の
舟の御の座敷をまじむらとて城に討てり
御膳の流石を討てり若狭の御の人の心
りて因土御前を討てり御膳の流石を討
てり御膳の流石を討てり御膳の流石を討

昔の古書とて珍重してゐる本は是れよりさう
うしくともいふ所の珍重なるもの後よりいへば
昔の古書とて珍重してゐる本は是れよりさう
うしくともいふ所の珍重なるもの後よりいへば
昔の古書とて珍重してゐる本は是れよりさう
うしくともいふ所の珍重なるもの後よりいへば
昔の古書とて珍重してゐる本は是れよりさう
うしくともいふ所の珍重なるもの後よりいへば

昔の古書とて珍重してゐる本は是れよりさう
うしくともいふ所の珍重なるもの後よりいへば
昔の古書とて珍重してゐる本は是れよりさう
うしくともいふ所の珍重なるもの後よりいへば
昔の古書とて珍重してゐる本は是れよりさう
うしくともいふ所の珍重なるもの後よりいへば
昔の古書とて珍重してゐる本は是れよりさう
うしくともいふ所の珍重なるもの後よりいへば

千餘人の兵を率ゐし。一隊千の副の者ありん
る。其刀長刀の先城中に充満して多勢の様よ
りては、城中の兵は、我れと四方の城へ飛
り、其の城を破り、逃行く者ぞ多し。其城
中は、濡りて、縁石十之、内溝は、水あり、其れを、焼死な
ん。其の軍を、破りて、大いなる、あてけを、武
政將の、この、も、と、討ち、つ、其、外、の、兵、も、皆、死
て、其、け、の、もの、煙、も、烟、して、集、得、を、免、難、あ、つ、は、村、に
潰、れ、て、投、り、つ、り、志、村、九、十、の、探、は、は、口、指、一、を、此、身、に、お

討死せしや、人々、と、泣、言、は、死、し、も、思、わ、れ、お、入、た
り、け、目、の、武、政、將、に、近、き、に、煙、次、舟、に、引、渡、し、火、煙
四方、に、充、満、し、力、を、盡、す、西、の、門、に、逃、れ、出、て、け、を、討、つ、り
敵、遠、う、け、討、ち、つ、り、ふ、ち、勝、止、り、糧、食、を、残、す、者、共、に、右、往
左、往、り、引、退、く、目、と、あ、て、ら、れ、ぬ、者、稀、し、其、後、夜、も、甲、ゆ、け
ば、討、せ、り、ふ、れ、一、山、形、路、に、寒、河、江、の、御、八、幡、林、に、陣、を、取
る、武、政、も、残、り、て、あ、ま、し、と、一、つ、た、い、も、多、勢、も、皆、死、す、り
ん、終、夜、の、軍、も、存、在、し、れ、が、整、く、白、岩、松、の、是、こ、と、し、末
に、切、腹、を、推、し、つ、陣、を、入、り、一、呼、斬、と、表、件、并、と、

山形より一尋母舟の義光の所寄より指生諸事詳
定の相違あり一叫軒の爲に智謀の是日上の句より在る
の事とん海に相違い入る山徒と信ひ月山の事と誠
に鳥渡く入る日去疾と好ら車海林一家の人質と不
然諸公捕りて是は年人佐力と爲りけり斗一男
一叫軒の取人降る義光へ上り今夜車海林意と討
可く事一尋母舟の事と云ふ去る頃橋向尋の取
合の味方も若干討死を又渠を識りて後味方も
れば勝の負りていふ高時上りも争ひ詰りて諸國

私せり御事とて隣を以て越後景持のためと書る所
義氏おとを親ひしつが誓ひ棄てて討死するは申さ
まじ事なるがしと云ふは小利を得んとし大利と
まじし道理なり而論初後一味方の所々をたぬ
の振に我氏と討つ時出陣の先陣の事とすれん
がた事と多しとて即尾張守一而を認め其口
の者兩人爲使者として況平へまといけ。状は白く
武任之身女伴法館小今及阿部源之南尉十郎娘久
込山也母變とてまら死せしむ。相平を名に佐父子相忽

の推挙申付ら討取一乗三勇士一乗三誠言感入
能更先之、御取を集事御平一柄心能合我申之
たし由之其隱心依心義是子、由馬之御一我
能改之、年来是下父子一武勇依其耳一歎之
存慈と捨て自今其是之、屬是下先、領地云我
遠ら流外重る於被辱忠勤可有恩賞者也此旨
茲に同公次人質、可被申相渡、神文事、を語取の
申、上民之歎不便、し玉故合和暨、其義先の余
と義、向後君臣一禮無違事、依心請状如件一

壬辰十五年五月廿。

氏家尾張守

近上人佐殿

与阿村、由と被之、一、獲事、近付、ナ、ナ、は、尾張守
此、信、義、た、ら、一、通、り、申、合、心、懸、り、義、先、の、事、に、依、り、は
ば、一、部、の、負、目、子、孫、の、世、に、傳、へ、り、と、し、使、り、給、ふ、に、
是、ら、一、人、に、一、し、事、を、給、せ、別、に、平、の、領、主、と、し、
是、ら、の、所、に、一、一、毎、年、に、一、納、り、一、す、り、

一、召、合、致、事、一、山、一、事、作、守、降、事、一、事、一

散〜〜〜あは重とみ精〜〜今辨慶と呼ば
ま〜〜山一の悪信ぞや〜〜信若き人ならば
並のねを見よ〜〜城戸と構ま〜〜五千人〜
親敵ち石を軽〜〜と擡げて子鞠と擡ぐが如く三
隣打まぞ投げた〜〜千の美子或は甲の女入
と打碎〜〜れ或は女を五筋打り〜〜れ入馬は
僻易〜〜して持物物具も打捨て四方へ馳とり
か〜〜けりよ〜〜多負ふ人〜〜美を亂〜〜して宛も信者あり
かく〜〜り城中〜〜の兵勝〜〜業〜〜して山下まで打ち出た

一所の幸なきを〜〜突入〜〜業〜〜の〜〜と〜〜怒〜〜る〜〜
よ敵陣より緋織の禮と詭歌の盃の縁をよめ兼毛
の馬の〜〜二〜〜行きた〜〜た〜〜た〜〜た〜〜た〜〜た〜〜た〜〜た〜〜
と押〜〜て進〜〜ち〜〜た〜〜た〜〜た〜〜た〜〜た〜〜た〜〜た〜〜
敵〜〜れ〜〜と〜〜宣〜〜ひ〜〜敵〜〜も〜〜退〜〜出〜〜た〜〜あ〜〜つ〜〜と〜〜近〜〜習〜〜の〜〜者〜〜若
大将の〜〜衣〜〜子〜〜と〜〜〜〜と〜〜勿〜〜新〜〜〜と〜〜當〜〜こ〜〜も〜〜ひ〜〜る
る袖と〜〜切〜〜て〜〜一文〜〜また〜〜よ〜〜あ〜〜ま〜〜せ〜〜う〜〜矢〜〜よ〜〜お〜〜け〜〜決
揮〜〜と〜〜只〜〜一〜〜討〜〜つ〜〜た〜〜お〜〜殺〜〜〜と〜〜〜と〜〜飛〜〜り〜〜首〜〜切〜〜て〜〜信〜〜者
多〜〜し〜〜所〜〜へ〜〜氏〜〜家〜〜尾〜〜花〜〜守〜〜若〜〜也〜〜と〜〜大〜〜ま〜〜た〜〜と〜〜あ〜〜ま〜〜し〜〜と〜〜擡〜〜げて

中一は其の題に准ひていふに大徳のせいせいで
武者の悔よりをきせらる事一が死一のしへ其
さうきまじらひて格向甚く即計あるも時自
感えよて自身の命を好くし得の事とては事
よき事なり故味方の行よ事ありと計れ
くしては事ありは其の結自あつたる事の事なり
よきよは事と流し申しけり義を自白して思
ふに事一は事なりは事なりけり故格向の事
事自いふ事とては事なりけり故格向の事

親ひのあははに酒にみよ事一は事なりは事なり
故に事一は事なりは事なりは事なりは事なり
事一は事なりは事なりは事なりは事なりは事なり
おは事の中へ今事なりは事なりは事なりは事なり
人自事一は事なりは事なりは事なりは事なりは事なり
の事なりは事なりは事なりは事なりは事なりは事なり
は事なりは事なりは事なりは事なりは事なりは事なり
は事なりは事なりは事なりは事なりは事なりは事なり
捕ひは事なりは事なりは事なりは事なりは事なりは事なり

織の鎧五枚盛の鎧をよわはし、矢搦提げてハ先
 のまげと在り持ちさうりきとし、如何御坊敵味
 方の目と碓とせんとしつけば、報寛、賢師大に手に交
 いてむ時、持負をよ、互に持ちて、打合ひけるが如
 何したるけん、甚の危くことつけ、山形勢の中より
 落炮よと、意をけし、とる間、甚の搦と、接
 て、自補せんと、飛せ、報寛む、押さへて、搦と
 紐と、事やしと、押合ひけるが、敵と、味方の、は、物と
 方と、流し、二人、争い、せ、つ、け、る、故、山、形、の、片、岸、濶し

報寛むと、めい、り、を、た、深、み、ぬ、ぬ、さ、し、度、ら、た、
 リ、下、の、敵、首、丈、の、谷、を、さ、し、け、る、に、ば、双、方、助、り、
 あり、金、持、の、様、も、さ、し、北、を、め、つ、ら、り、今、羽、里、山、
 の、間、の、搦、の、報、寛、を、さ、し、け、る、に、ば、
 る、報、新、の、も、と、さ、し、搦、合、ひ、を、と、し、
 所、の、報、新、の、ま、を、搦、り、下、を、さ、し、け、る、又、意、を、
 して、の、報、新、の、ま、を、搦、り、下、を、さ、し、け、る、
 かの、報、新、の、ま、を、搦、り、下、を、さ、し、
 河、の、報、新、の、ま、を、搦、り、下、を、さ、し、

とる鬼神を以て家たむるは是れ其守るべきこと
にば老武者若武者二万餘人喚叫してあつり
十文字に鬼破り多とて進み開いたる城中に
軍旗の赤に白軍人の旗の白に赤の旗の赤に
たぬりしに次第よ力を添へて城をとりしに
く義走の威を脱ぎて糧の末取とて領し
群を振上げ下知あつて進み其勢を
崖をいりて此勢の進むごとくして進みしに
城の外堀に己が拵ふるあは逆為あり防がれ城に得

らんとお行なはれし跡跡のふと散らすがかく四方八百
逃散りしははるかにあつたはるかにあつたはるかに
りし勢の敵の追はれぬる底に我軍も死す者
ありしは散らりしは城の左將も死す其外中
をたつとぬるは城中の名を得る者廿四人
城戸口をも取ししは城を搦り立て進む
し城戸を固ら給へ城の戸口は城の戸口は城の
まはりしは城の戸口は城の戸口は城の戸口は城の
まはりしは城の戸口は城の戸口は城の戸口は城の

打振て廻行く時方を持多の〜進て意のよ中〜
今頼より〜匙入て意を幸よ破窓の〜と打倒を
而と向るを極ぞ〜の大方解〜とて
分取と愛よ山形路の中より高松園を向き義と名
乗て山極道の腰をよ洗革の大禮重て二尺三寸乃
た刀よ廿世指する思羽の矢有るよ白首の笠を猪首に
とるぢし塗籠障のう持る思の跡ゆさく〜金履
輪の鞆置り〜乗る〜けるが自今討取たる敵の首より
降の是よ多き中より持せて能登字が障をえ物して

辰〜け〜の〜の〜我〜細〜結
負を決〜し〜一〜能登字吃や
て〜ち〜中〜し〜一〜我〜し〜し〜洗持の意の
や〜し〜持〜打〜と〜ち〜は〜は〜急〜之〜と〜し〜
〜し〜頭〜咽〜お〜込〜し〜ん〜後〜し〜お〜す〜る〜れ〜け〜の〜法〜勢
此勢よ遊易〜し〜我〜先〜し〜し〜退〜く〜所〜よ〜又〜さ〜ん〜極〜の〜大
の男烏帽子軍よ通し〜の鏡〜を〜し〜葉色〜の〜し〜よ〜名〜説
〜り〜て〜葉〜さ〜ら〜し〜が〜五尺余のよ降〜と〜以〜て〜安間道勢
名乗て打て着る其勢あ〜る〜と〜掛〜て〜見〜し〜ける。ち音声

りあり一観臺の裏よりして汝何者ぞや名をある
りありといひけしはあるを馬鹿の娘の七郎信長
年十七歳にして多幸しける。能登守は是れと笑ひて信健
からる者比汝を討つべしといふ。今人信一と
いふ者もいふ。向後頼朝の御代に比しては、
流しに、歌十味方の戦場にて、陣よりいひて、
誰か見えぬぞ、誰か見えぬぞ、あはれいふ。
なごころ、今のの軍勢は、信一は、信一、
十郎のいふは、汝の腹に、あはれいふ、七郎の

能登守を討つべしといふと、笑ひけしは、七郎など
は、むむ能登守大カク、其腕よ、あはれいふ、
肘を討たし、なごころ、能登守も、信一も、
けし、は、信一を、あはれいふ、と、思ひ、
て、肘を、信一、あはれいふ、口惜し、
ける、を、信一、あはれいふ、
鳥の、卵の中より、其聲、衆鳥、
矢、猪、ケ、あはれいふ、
敵、あはれいふ、

天皇城門者能守別心之事

其頃城中より沼澤に美守とて一色終理を以て置たり
其頃が容貌美舞ししものいれ舞の飽きて好
傳ひし人の印を好し舞其くして色が美守
白果のきて偏執深き者なきも主人の愛執に依て城中
の大小事しつ御執行ひける好し能守が威勢を悟る
楊國が安福の隔しし主の仇とよるも其く

音思して少の身もこの身と愛するも其く之果
其頃文音とて女の胸中し似る男なれば下者の執り下
部京の世よりれ随順の思女等し印しつ御守とて
川とや思ひて能守の御守の思しし人の愛しし
こそ其權をといひ他の印を破りて好しもうて其頃
其頃双六の御守をいふ能守は其頃其頃其頃其頃
人あれは延あうて好しは其頃の者なれども其頃
其頃の御守の思しし其頃の城を其頃の
其頃の御守は其頃の思しし其頃の御守は其頃の

けぞりて懸く事なくも打解すべし此は其のたがひ
しよはきくぬ風情よしはあつ侍止ぬは其のこゝろを操
くして油の用を教なきにけり是は皆ち将軍の御法に
て沼澤の園首と云ふものとあつしけり故城中の要
を好むる事ごとくさへいふけり此は其の御法に
りしり持口より上の峰より城の頂上より其の御法に
らたなる事あり大指堂として侍の形なるもさうとあつ
せり此のあつけりし毎、能登古の境にせよ入りし
事一と云ふ地蔵院と自に備へけりけるが、本丸の御

えとて沼澤の畔に甲申の御法に下る事
御法を習ふ事と云ふ事一御法に御法に御法に
こゝり合御法の御法に御法に御法に御法に
地もさへ見えざりける後、其の御法に御法に
よ昔、其の御法に御法に御法に御法に御法に
ひ一御法に御法に御法に御法に御法に御法に
ま子けり鬼の御法に御法に御法に御法に御法に
後、けり御法に御法に御法に御法に御法に御法に
りける事、御法に御法に御法に御法に御法に御法に

任をあたへた九万八千の軍神と申す中に破軍星武
以てカ一と云ふ地帯となりて十男と化し勝軍神や
つて云々々と大出立と云ふ所の一妻岩山権現として
は流るゝと云ふ所の義ありて新場の景平より千秋万
年の内行はつて結句社壇を破壇して平地へ下し
てありと云ふと大また懐くといふけれど城を治
得る内行はつて挨拶しつゝと一法の道理もして
以物見ても即士の法を祐玉巫女の掃く奈祝など
てらふと教へしと申す一思ふとも殊も城の将を登

たりと云ふ所の一法も是れ故城中のりてまゝと
ありてすまやち将のなまをいふりては名目ば軍
の習ふ勢のまじりて教へしつゝと申すといふりて
城の申すも一と云ふ所の故言はれしと申す
物も殿守と建つべきと云ふ所の軍神の申す意も
いふ所の武士の若くは自様の義をいふるに
し即ちの昔より存する事なると云ふ所の
申す一気と云ふ所の義もいふるに重なりて名目
類もいふる事と云ふ所の義もいふるに挨拶しつゝ良薬

の... 城... 神... 再... 地... 流... 今... 城... 将... 延... 能... 守... 降... 之... 事... 上... 攻... 城... 為... 下... 心... 戰... 為... 上... 世... 護... 夫... 用... 兵... 道... 攻... 心... 為... 上... 攻... 城... 為... 下... 心... 戰... 為... 上...

能守降之

世の護の夫用兵道攻心为上攻城為下

兵戰為下と宣ひ義孝氏家を長守と宣ひける
は昔越王句踐吳王夫差と會稽山にて戦ひ越
王を捕られしは其臣范蠡の謀を固むし
故り吳王の命は伍子胥とりし魯屋の計を
謀故吳王は勝つるが後伍子胥を刑罰
して我一人の了簡ゆゑ後伍子胥の計を
范蠡越王に申せし伍子胥の計を固む
と固く守るべし何れも非ざる事なり
後け方勝利ありしと申せしか今城中の延津

能登守の勇力のみぢぐ計策智謀其勝也たり
彼がしん松は皆似るを友とやの事共なきは政を
ん事難しき目も何者か一方の大將共
おしぐしと宣ひるは氏家と始りては計畧を極
すしと極しむめと宣ひし一為軍の時を極し其
後教を極し我をよき書と以て延津に宣ひけるは
内一其方の御方のみぢぐの計畧の極
めて目と極しむめと宣ひるは氏家と始りては計畧を極
すしと極しむめと宣ひるは氏家と始りては計畧を極
すしと極しむめと宣ひるは氏家と始りては計畧を極

羽源記卷之第四目錄

- 一 義政合戰輝宗出馬是柏木山之事
- 一 輝宗公仙臺へ歸陣之事
- 一 輝宗公籠中殿上へ御越御法事之夏
- 一 輝宗公樵死是二本松右京亮討死之事
- 一 氏家智畧并義政最後之事

羽源記 卷之四

義政合戦 福宗出馬 美柏木山之事

奥州の上の山とてあり源氏の末葉筑前守義政と
いふあり是は義光の御母婿なりきりてはよき事なり
なり或時義政家の老臣里見内藏が同民部や
申家の子と名まの申されけるはよき方達よなる道徳
義光とは不和也物言ども上の山少地のこころなれば物
人の覚悟とて敵討しつゝ思ふ事一入る事ハ

一 義政合戦 福宗出馬 美柏木山之事
一 義政合戦 福宗出馬 美柏木山之事
一 義政合戦 福宗出馬 美柏木山之事

の輝幸の義光の姉婿とて既し男子二人までありて
ついでに日頃より義光不和とて終に道隆とて
まゝ河内へ移りて路を法にまゝにまゝに
抄何とらひしにば商人の計畧とて輝宗
大崎とてか勢あつた定ち義光のまゝに
馬ありて左に大所置りて其中に
まゝの人教と書し谷へ隠し
ふ方へ取違ひ難ひなぞ利を得て疑
物ありてまた恨む別輝宗公へ使者とて申入る

ま日以義光と對し其恨ありて人まゝの身
て今我々の新くおれが輝宗公はまゝに
まゝは行とて我ひをまゝに
左ありて最上中務のまゝに
まゝにまゝに
恨みまゝに
まゝの輝宗公は
まゝにまゝに
まゝにまゝに
まゝにまゝに

病を杜けて防ぎけり。事あるに今如く、新より木の刺まで
長途の兵糧もきり、降りくまると途と持合ふ。心
鬼を欺く兵共も、隙を以て足と立置きたる。長光之を見
澄まして、本陣より相方の者數を打ち付け、兵を遣り
と伏し居る兵ども、一なる懸てさうの腰へ走り出で
輝宗公の本陣へ、櫓をよ見り。二百挺の銃炮と、雨
霰の如く登掛け。は、壁のなぐり、響きあがり、敵想よ
らね事、ツレバ輝宗公の旗を馳立て、集山棚をせり、
ひきき合ふ。あゝ先度一軍して弱くと、休居る山形

勢相圖の時分、今ぞとて、延清能守例の旗、棒、楯、
て、真先、の薙り、も、飯田少一郎、我方、うづと、喚び、薙る
之を見て、惣軍勢、氏家、尾張守を、始り、て、十四、日の、備
へ、打物、以て、我、先、と、切、り、つ、搦、と、搦、んで、戦、へ、を、仙、台、勢
先陣、後陣、一、つ、あ、り、て、追、は、り、つ、討、た、り、つ、
輝宗公之を見て、澄澄と、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、の、ひ、け、り
は、見、音、も、味、方、の、敵、様、も、い、つ、も、何、程、の、事、ら
何、も、い、つ、け、我、場、を、逃、延、び、て、何、地、ま、で、行、く、と、い、つ、も、
今、い、つ、死、せ、し、と、て、自、ら、も、死、を、以、て、進、み、の、と、て、近、寄、り

四半路と丸くして開き合せぬ人ぞ名を惜しむ郎
等家子と立舞う、爰に大将のよきとありし軍は
我に討死はつゝの意さ上の山に落ちしをいふと地
事にて中を隔て討死しつゝ其傍に漸く上の山に
取らるゝ流石敗軍の士卒といひをこゝ一人も膽た
る氣色も無く死して去りて死んで落ちし刺違死すも
馬上より自言すもつゝ谷地を平河系細谷半郷迄
草村をめぐり死體を充滿して歸の色とて夢に
為紅いもつゝにあり歎味方の死はる者幾人もあり

やしく其日山形へ討取る首三千四百五十四指 結海
果てしやう

輝宗公仙臺へ帰陣之事

知彼知己百戦百勝 知己不知彼一勝一負 不知己不
知彼百戦百敗 是万古不易の理なり 上の山に所
集りたる軍兵数万騎ありけりよ 義政の居城なりけりば
兵糧水も澤山あり 要害候を得て山谷鑿きしるふな
まば山形公 即刻推挙すべしと叶はば 山形路を以て

向し陣と取て人馬の息を休めて日を送る然るに輝宗
公の奥方逢くと仙臺より張輿の上の山まで昇
りて輝宗を入室に召し出さる頃日何れは陣と思ひ
ふくは兄弟の合戦實に殊一事は事比又義守逃
去の御君と云れ之の時事をもひ構へて義走と申す
是れは年月を送る中一古の事と成りて一は
弟に火と道との如く事をもひ御言上杉佐竹一
一は事をもひ事をもひ事をもひ事をもひ事をもひ
仙臺の事をもひ事をもひ事をもひ事をもひ事をもひ

輝宗後部と信と馬少将と嗜み人
一は事をもひ事をもひ事をもひ事をもひ事をもひ
執りし事のある事一は事をもひ事をもひ事をもひ
一は事をもひ事をもひ事をもひ事をもひ事をもひ
新めしと流を流一は事をもひ事をもひ事をもひ
制せし事一は事をもひ事をもひ事をもひ事をもひ
是れは事をもひ事をもひ事をもひ事をもひ事をもひ
一は事をもひ事をもひ事をもひ事をもひ事をもひ

輝宗公の薨中 山形へ入臨ありて義孝公は歎ありしを

輝宗公の薨中 山形へ入臨ありて義孝公は歎ありしを
ばえ来近きは中 夕暮にば 初候とてそなくもて 輝宗公
の北の臺と申をとり 義孝公のは娘とせば 山形へは 姉君な
り中 籠へ侍どり 入とてまゐりて 義孝公のは 薨中 一と
ぢりまゐりて 山形へは 女は力 扱とて 様とて ちりて
ども 頃日の全親よ 義孝公の 兵討死し けこば 其の縁故
睦みよ 治りても 行 愁の 爰と 言ふる 両家の 從親の 顔色

さう ぢりて 山形へ 入臨ありて 義孝公の 薨中 一と
の 物も 言ふ 味と 言ふ ありし 風情と して 只 作り 事とて
父 義孝公の 薨中 一と 言ふ 義孝公の 薨中 一と
くも 心 憂へ して 薨中 一と 言ふ 義孝公の 薨中 一と
一と 世の中 一と 言ふ 義孝公の 薨中 一と
ぢり 義孝公の 薨中 一と 言ふ 義孝公の 薨中 一と
は 義孝公の 薨中 一と 言ふ 義孝公の 薨中 一と
北方 言ひ けり 今 言ふ 不意の 事よ 義孝公の 薨中 一と
義孝公の 討死 ありし 時 其 妻 老 母 其の 杖 悲 不 便 あり

彼等々孝養ありて其の法華經元千日の念誦を始め
さすべし又其義を子孫無量に傳へば其祈りも
ありて善中より其心成ると宣ふを善中より其心
と婦公の原より其心成ると宣ふを善中より其心
り其心成ると宣ふを善中より其心成ると宣ふを
光明寺にて其の開白は其の法華經ありて其の中
女性方と其の心成ると宣ふを善中より其心成ると
法上之魂得脱の爲に法華經中の男女所生して
中籠りて其食物と施すありて其法華經の類

卷物金財未穀諸事諸山へ持て領受の千部あり
けり相里山一葉菩提院へ千部の章都婆と送
立しありて其金頂山智樂寺と供養して
遣ふれけり其法華經中より其心成ると宣ふを
共を成りて其心成ると宣ふを善中より其心成ると
申されしありて其心成ると宣ふを善中より其心成ると
て八宗の信尼は法華ありて上の山領り成濟境
山へ田畑河原ありて其心成ると宣ふを善中より其心
痛経呪ありて其心成ると宣ふを善中より其心成ると

頃や死骸山の如くは修して新とらけ者女と
言くは誠は此進喜とて見えては其のや遍照
心光の如く千日念佛開闢の道す師天台禪真
言の中より選びて了んて免れ善提後の上人相具の
位信を知らずと定りける時宗の族申出でけ
るは遊移派の上人の躰念佛どうも終は説法
の儀式なり他宗の風流を如何とせし^か流^も先
明寺上人を始め区達の儀は説法の道す師の并
去りては^し殊に善提院の上人を天台一家の貴

長きば禪宗天台宗の中より諸法上手并古の人
然るべきに其宛りける後佛行道す^りけ^る善提
院の上人善座より善提院を擡げは^は住^の男
女も法宗の人多し其宗は分る^るい^ふも^も此^の善提
院の如くは都て秘迹年を佛の諸法れば諸宗
皆釋尊の法弟子なり然るに^は顯密禪の^の宗を^を佛制
の戒定慧と事としはり又和上の浄土一向専日蓮宗の
在名是自と事ともありたる是よりいふ^は此^の宗の^の中
間、戒定慧と心裁ける人も是をけり又顯密禪の^の中

一 念佛和名を修し中より亦中多く修る惣もして
 天台眞言の和名を皆親念の念佛として唯少し淨土
 と云ふ佛を拜する心外に致さず何れ淨土指帰と云く
 歴代諸佛著述淨土傳記淨業之文無非祖聖遺
 誡淺深巧拙片言隻字同歸於善天台智者大師
 悟法花三昧說已心所行曰一心三觀直示一心當
 處即空全體即假亦空亦有非空非有不可湊泊
 不容擬議心路絕處名為佛故淨土之教至手天
 台其說大備昭々猶揭日月而輝大虛也又如僧

問馬祖如何是佛祖曰即心是佛是此禪家公案也
 又四明日稱彼佛名心雖相續不可類是曰定心
 都て心外に致さずたゞと思ふことごとく物といはなき
 の軍起して諸士忠功の爲に死するは武士たる人の
 第一の喜なり源氏の打鐘する兩年少くも世
 常と思ふ事あるを思ふことごとく人問世界
 無常なる限なく欲界色界の天と下界の心
 界たる常位保つ事もなげなくやめやと思ふ
 万の若きは先立ち老い少く死す様も事として人は

目こぼさるるて家なき一々煙のきてやらず灰は飛を
面うたよ世の人毎より中より我の命まぶゆべり
あはれ一海せしそちのちよきと年ゆきし陰屋し
後こそあせとば新づべけしちよきやぶる方とあま
しあまの依て人の命よけ不定りる事ハ風ハ陰を
言のわく日ハ向ふ影のさあし解りる影は眼高き遠
り志死老若後もし是立老後ハ若ヨリ弱く病中
は健りる時よりましく年寄より陰終ハ無しく今
生りて後生ハ悲しくうづし勉めしとくく菩提と

本め洋業を修まじし一生善悪のふ化の業必自然に
て現しつゝ影を之所謂^十五逆ハ地獄^十現前し
悪疾^十闇^十苦^十畜生^十現前と五戒^十善^十人^十天^十現し
と楞嚴經に曰衆生憶念^十佛^十理^十前^十當^十來^十必^十定^十見^十佛^十と
如何^十と^十ば^十多^十生^十の^十慣^十習^十と^十以^十て^十妻^十よ^十と^十愛^十と^十迷^十し^十財^十寶^十
と^十會^十と^十止^十り^十て^十妻^十想^十是^十り^十起^十り^十て^十浪^十新^十し^十病^十の^十苦^十も^十た
加^十り^十心^十痛^十寒^十く^十知^十意^十乱^十きて^十氣^十息^十喘^十き^十心^十念^十と^十失^十却^十し
悪^十想^十と^十思^十え^十し^十終^十り^十者^十後^十必^十迷^十倒^十も^十り^十ん^十因^十果^十の^十理^十自
ら^十觸^十して^十多^十し^十然^十る^十に^十多^十く^十臨^十終^十の^十會^十と^十す^十べ^十し^十と^十思^十ふ^十人

けあらし、目、修終、を、心掛く、人、怖、死、修、て、
嗜、ま、し、り、ど、思、は、ぶ、必、ら、一、ら、ま、ど、二、度、に、修、ま、り、て、又、
能、ま、ぶ、道、を、た、ら、ん、年、未、し、別、に、て、意、悟、を、ま、り、人、
時、ま、り、て、過、あ、ら、ぬ、ぞ、う、一、死、や、死、ま、す、時、を、あ、げ、ず、
別、ま、り、修、終、の、節、ぞ、う、一、年、ま、よ、く、志、を、定、ま、り、人、
必、死、す、事、決、定、し、け、な、志、死、の、面、を、む、し、修、終、道、を、
修、つ、ま、り、一、病、の、布、を、て、妻、子、財、物、を、弟、一、て、死、り、
し、一、地、を、う、し、志、死、の、人、其、念、輕、り、故、一、念、の、性、善、
と、受、く、れ、ど、人、天、の、果、と、感、を、病、死、の、人、其、念、重、き、故、

五、新、事、ま、り、一、支、四、人、別、に、け、り、は、心、外、よ、つ、
り、ど、佛、の、去、来、り、一、故、一、初、經、の、曰、是、心、是、佛、と、今、何、ぞ、
見、佛、未、定、の、事、な、ん、答、是、心、是、佛、と、一、次、前、来、
定、と、し、り、皆、是、仏、説、り、同、一、佛、釋、尊、の、説、な、れ、ば、豈、
而、意、あ、ら、ん、や、唯、捨、實、の、教、よ、疑、ふ、べ、し、ん、ん、唯、心、視、
と、成、ぜ、る、人、の、心、法、を、通、り、て、境、は、身、せ、ど、是、心、是、佛、り、
外、と、求、む、あ、り、一、如、幻、性、空、り、の、故、よ、心、佛、こ、り、り、
べ、し、ん、ん、ん、空、有、を、理、を、以、て、幻、の、中、相、り、一、し、
る、し、ず、故、よ、心、佛、こ、り、増、せず、去、来、り、一、て、此、前、の、事、

と妨がず現即無現、見即無見、事理能攝、神力不思議
して皆是伊飲す所為り故に、幸に中途に叶ふ是を以
て併に不來にして來り、心は不來して去り、能はる水
法淨くもば、満月底に落ち、感應道交、信心自己を
るを、永明素禪の曰く、法身真佛の本生、滅りて復す
迷ひ化と起り、迷根と引接ると是即如來の在、死力と以て
彼有縁の六生をして壽の想念してよく自心と執り
併の來迎とせしむ、於境中の像の如く、内と外とに
入るべし、唯信佛の因縁を、悟りて各々の言力が

如來の鏡中に照りて、聽通の理併、則來迎の法身
のまの影、想して一念、法陀と視、これ法界、永
く法陀如來の者の心、照りていつ時、行者阿は陀併
聽通一如の如來の心、して下座せらる、身法の通、俗
勿く穢むの苦界を、勤して法淨の極樂に生れける
心地して、あぶぬ、塵中、殊に、禪宗公の北の方、是縁
の二儀、一、感得外、二、照りて、三、悟りて、四、入る、
子と入りて、法を、一、妻妾、二、愛執の言、と、掛ひ
高麗の、一、聲、して、生死、轉變の、言、た、と、觀、り、

夏如の法住より貞女の儀情を驚き耳にみまよこと
く事と取らして利害をわきまわすに
輝宗公の
の方より極む女よりし故和手よりして思はざむと西
に兵士共にお死を思て一生の樂をこそせむとけり

輝宗公権死二本松本宗亮討死之事

其後輝宗公同國にちね本宗亮に討らせむと
尋ねられたるに本年申上り政宗の老父輝宗公二本松右
宗亮と覺悟をなす天正二年より義弘同四年の春

暖く和睦はる古宗亮旗本の儀に打紙を持来はる
時子細之より輝宗公古宗に捕らるるに政宗怒り跡
を慕ふといふも古宗と拵りて輝宗公の胸に突かして
既し川立行く事其所に候るに政宗生年十七歳法皇を
下知りしに輝宗公を敵の城内へ入りしをば後悔
ゆづりて降参の外をりていふに古宗に敵を討取
り子孫を立て孝養長政をば下知りしに其色見
えて敵輝宗公と宗亮を政宗に場所して古宗をば
五十人政宗の目には討取らば古宗をば古宗と責む初

睦して妻子城をのりて海を其時男よと集りしり
二本松後内室子息造して今津へ落部くそれより
以京處しう城と改修して今津へ馬を入るとも其由
りえ今津より佐竹へ加勢と請上今津佐竹方衆をせて
五萬餘騎凶暴に對陣せんとす之凶暴悪津の城へ
四千五百とて部をけ悪津の城と申へ山城とて西より成
まうして大隈の流石として岩よりして岩石なり其城山の下
り廻りて十二丁測りし知るに黄色の蛇ありし由よ今津
より一山未申より辰己までを城二重なりとの丸よりと

手地のかく自如了登り丸の良の方より付き前のかく測りこの
丸巻城より本丑室子の隅まで隔る深度大手牽搦此
城内良より申酉九丁より辰己より西までして今津城
之深義家公繩張りて築られしと申はく佐竹今津の
習い大隈と西に数千刻の小石と掛懸けて篝火と万燈の
如くは燈を常懸しくす也其後今津ありておのり御ふといへ
る佐竹今津敗軍して佐竹を國幸陸へ行き三浦
を戦居城今津へ引く凶暴今津徳平よりあぶげは悪津
の城名城より故敵の馬を奪りたる故なりと云ふ大隈の

小濱と甲州へ行きしより、古坂あり、平地にして輝宗公と二木
松平宗亮と戦ひありし時築きし城あり、生後浦生飛騨
守殿は取立の者、野池信濃二万石より居る二木松平と長く
五日と隈川を渡り、小旗山と云ひて并財天河、山と小旗
とは夏源頼義と自任進討の時山の藪より主従十五騎討
たされて山へ引上り、及ぶが并財にて復せしより、頼義公
戦状を記しあり、頼義公は又新畧を生後貞任係り来じ
て山と攻めて二万の兵を以て新庄に西巻きたり、勢山者、新庄
百十の部、かく頼義公に自告り及ぶありし時、新庄より、新庄

澄樓と登りて澄と携く、むきば頼義の内より山は岸あり
と、頼義公は兵、築くところ、之を感入、岩石ハ武士の馬下より、之をたり
頼義公之は、惟じて引退く、頼義公虎口の死を迫り、あひ敗
軍の幸と、是の又、二十、けより、して味方日に、に信一、終よ
お千騎の頼義と、御一子孫、を、徳と、遣り、あり、し、并財
天のか、復とも、ゆえ、より、然るに、信一、頼義公、は、建立、より、金
銀と、追へ、玉の、階、に、輝き、降の、旗、金の、花、紅、曼、風、に、靡、き、其、外
け、山の、葉、谷、谷、年、堂、教、また、書、下、新、一、と、り、也、
奥、羽、道、
程、記、より、見、たり

と受ける者の一は出家物語として皆別民部方への
領をさし下すべし一書きまらざるに於ては味方へ
みかへりしとある民部入味方よりわく義政と討つ事
易しと申しけり義政の御心儀をておとすべしと申
家とて先づ見見えおの心儀をりては後民部と購
書はまじりて定しと宗牛の尾張守の誠はわけて
義政退ははしりて入申百あふと申しけりは出家を
ませ尾張守宗牛を候として申合ふては出家を
折首とて内藏入申しけり是るは存の通書候と見方

氏家尾張守の義政が御無使者にて申すは近
義政と馬あまを御おとすにあらはしけり
おれは心付申すは様と申すは御宗
と高き山海は海は馬をたしとて
は義政と和睦の由然らば後法申者より後城
にありしをいふをあらはし見よの事と永く断絶
歎きしを録しあり歎きまらざるは何年にか別
と申しけりは内初めより親と事とをまは信は申
の如く是と仙若とは和睦の事と味方へ合方と

たかひなり一義政公の正徳ノ日と雖もたびたびを捕せし
事疑り一甚しき事代々の主恩を懐て牙を所見之
と改まるべきよりいづれも詮討死せしと思定せしと後
しける内病か而存活けしむる急病の返答もいふげき
しより直に民部年々行末に向て存の應りけるに民部
内病女と申し大かた歎まじしものお怒りて義政公
の正徳一三三の歳討せりける一銀言に前この如く御
業をかかりしもの國を阻しませりし後國一をわ
りし一殊又は年一和睦を申しお家の滅せしもの同

くすむるべし其上義政公智仁勇の三徳を盡しお家世
ち一近隣随つきてし事なり一我の道理を以て知
るに依り義政公の詩云と申降集りしれは此中事と
至内出りし事依りて合戦のいぶ聞しと相罵しし事並
会を極てし所詮義政公の正徳方申来を立て子孫業
えんと思へし不忠の者と言はれしに格一けしむる後
かき日と違ひしと決りけしむれば御出家候しと思ひ候
合義政公の正徳の詩云とは義政公の感こゝろに
あつしもの同様の事いふにたして斯く申す物もめで安

皆の思を^ていへば一能くは思集りてく一と申すも
思をいへば一思集りてく一と申すも
申すも一思集りてく一と申すも
申すも一思集りてく一と申すも
申すも一思集りてく一と申すも
申すも一思集りてく一と申すも
申すも一思集りてく一と申すも
申すも一思集りてく一と申すも
申すも一思集りてく一と申すも
申すも一思集りてく一と申すも

りて尾張守は之のてし物決りてく一所と異志と信
いは自筆としてをうん山と標中より取りなげ
民部とは揮毫を揮えりて今日異志に依りて送^意
為進討兵と集む雖然序、諸民山野に送事不便に誅
也依之信是量也知るに方心危の趣は少神妙なり
至物もなき異政討取は新風忠勤則異政跡職跡な
くとも知れ者之民部則流路にては書と録といひ
彼と家との甲一けるはけな某が心危に異志をまて
及官はも執事には自筆のて書送りてく一不偏に送信

のはるきりくとして百市十部とあひのちと送らうと賜ふ所の
は書は文章と少し減り天晴好き大将の思入りけさば
けよと先づ見よとの内おかりしヤサ義義行りなくど判殺
し一先後義政と討取る事下多角万事を評定死くは
義政公法心易く思はれたは近寄の士人一人をたれたる旨
ナル旨を出さずして又は令お察し一先は屋住守物
つしては御筆のま相お授守と云ふ古の旨ま
に言あられ上のしく御筆諸事の評定あざうと
義政君民部と遠心とすむは後行く事もあると一先は
臣敵と敵く中合せ何國までも追慕す是非討取るべし未
だ事なむとる前も國中へお察あむをぬりし諸侍軍に
對し中より様を公生の義の上のしく湯沼河一先は申
掛け民部と計り敵く内談る由信付られお察は山取
しとらちの法法一先はとらうけり相授守民部と對るは諸
事の評定と定らふ人のしく内お察を好まむを義政君
をよと申しけさば内お察以外の氣色を授じ才の民部
を白眼に義と知らぬ人々御代の主とて捨て今義
先へ頼られよとな思とよむ事ぞうし一先は頼られは

と云ふ内務省上はてまなくこの事と云葉しては安
と跪きし徳力よもと御くしと違ふたぐみ置りし
たはらぬすするの隠居する大力の事共先かきて引退せ
る前後と跪掛ひ在ちと実徳くればも大勢ありて
かゝる御もぞん刺殺しは候時刺殺しちを義
政と一徳とみよと盛れよの事よらるるし夜更
り書し十人ししと日比民部方へ他ひちて又
しける義政近習の侍し佐平内とらふ事と
世帯の頼みけしが黒儀よぬも同々許しける事
あるとて紙と書しせむし方内坪の事と

あるとて紙と書しせむし方内坪の事と
中と入らるりひける事内録事孫安と云ふ
言しある事ししと中合帰しける事夜更
更りける事様事し民部方へは自務と自事同
しと付めし事老けの事夜更方痛しと義
政と思ふ事し討取し事隠す事義政の事
とと下りてかゝる事民部方より使を以てし
る事義政の事し討取し事隠す事義政の事
内務省の事し討取し事義政の事し討取し

取私定よなれば何の軍に降生おとる人か若又異
儀ある様こそ申すに御尋ね申さる申さるし色は侍の
あんと念儀置かしていふも義政公杖柱を頼まれた由
藤太の討もして民部はのれ誰ぞとねして龍城を
つま獲りして我走りと民部着て降参しける相模守山
元へゆり右の越村嘉申しけまば義走は脱去恨し屋延ち
とふもこれの方計策令始めざるまといひなき就中し夜
の謀御もしてとてか増と下されし則民部山形へ参り
は月見と止けしは決約未の如く義政志行も不残不領一万

八千石安堵の由書と賜う急ぎ上の山へ参り内務めし候
事ありしは御由信付されしは御新の十日高女妻女
に下女入らば一して左郷へ参り候ひしに高女の子と懐中へ抱き
吹雪の敷き居たり候し民部山形へ参り内務めし候
隠居に於ては御由参り候し御由の御由の御由の御由の御由
は御由の御由は女房上の山領より御由の御由の御由の御由
美濃寺より御由の御由の御由の御由の御由の御由の御由
くは合けりしを御由の御由の御由の御由の御由の御由の御由
御由の御由の御由の御由の御由の御由の御由の御由の御由

しる事長し文の教と観之と山所入る民部と観之(44)
ども用ふ者一して中世と(5)かひ善あての事(6)を念と
敬せんと民部と回入一たる一族あま討取けり生怪(7)連
政事(8)の召出され大坂一札も(9)はよむ(10)の栢(11)を(12)軍(13)
召は(14)き(15)ける(16)百姓(17)を(18)事(19)に(20)就(21)て(22)徳(23)の(24)心(25)果(26)服(27)事(28)法
け(29)は(30)江(31)州(32)の(33)年(34)の(35)里(36)見(37)御(38)子(39)節(40)と(41)名(42)棄(43)り(44)は(45)族(46)本(47)と(48)領(49)る(50)者
た(51)り(52)と(53)け(54)り(55)嬰(56)子(57)の(58)事(59)ぞ(60)り(61)

羽澤記卷之第四終

68565

山形県立図書館



1-0336082-4